

青谷地域未来プラン(素案)

= 青谷町がめざす将来像 =
「いつまでも暮らしたい、住んでみたい、
歴史に彩られた活気とにぎわいに
あふれるまち 青谷町」



あおや かみじろう

鳥取市青谷町総合支所

令和 年 月策定

《目 次》

1.	地域未来プランの策定趣旨	2
2.	地域の現況（位置・地勢・土地利用・人口）	
(1)	位置、地勢	2
(2)	土地利用	3
(3)	人口	3
3.	地域の特性・資源（歴史、特性、資源）	
(1)	地域の歴史	4
(2)	地域の特性	5
(3)	地域の資源	5
4.	地域の現状と課題、めざす将来像	
	【地域の現状と課題】	
①	地場産業の育成による活力ある産業の創出	6
②	地域資源を活用した観光振興	8
③	安心して暮らせる中山間地域づくり	9
④	地域福祉の充実による元気なまちづくり	10
⑤	地域と連携した定住人口の増進	12
	【めざす将来像】	14
5.	プランの推進にむけて	
(1)	連携・協働によるプランの推進体制	15
(2)	評価・検証	15

1. 地域未来プランの策定趣旨

平成16年11月1日、鳥取市に周辺8町村が編入合併し新たな鳥取市が生まれました。新市域には「地域審議会」やその後の会議体である「地域振興会議」を設置し、「新市まちづくり計画」や「新市域振興ビジョン」を基に、それぞれの地域特有の地域振興・まちづくりについて検討してきました。

青谷地域においては、平成28年3月に、地域の特色を活かしたまちづくり計画として第1期「青谷町版総合戦略」を策定し、令和3年に「第11次鳥取市総合計画」(基本計画:令和3年度～令和7年度)や、その重点施策に位置づける「第2期鳥取市創生総合戦略」などとの整合を図りながら第2期戦略を策定して、青谷地域のまちづくりの方向性を明らかにし、地域振興に取り組んできたところです。

今般、新市域振興ビジョン推進期間が令和5年度末で終了したことに伴い、新市域振興ビジョンに掲げて取り組んでいる事業を「鳥取市中山間地域対策強化方針」に引き継ぐとともに、青谷町版総合戦略に掲げる施策体系と一本化することにより、現在直面している青谷町特有の課題に対し、令和7年度から5年間の施策の方向性と具体的な取り組みを明らかにするために、本プランを作成するものです。

2. 地域の現況(位置・地勢・土地利用・人口)

(1)位置・地勢

鳥取市の最も西側に位置する青谷地域は、山地、溶岩台地が多くを占め、勝部川と日置川が、二つの谷と河口に青谷平野を形成して、北の日本海に流れ注いでいます。海岸線には、日本海に突出した溶岩台地の長尾鼻(ながおばな)などの岩礁海岸、その間に井手(いで)ヶ浜など鳴り砂の浜、そして砂丘が広がっています。

面積 68.2 平方 km で、鳥取市全体に占める面積割合は 8.9%、人口は 5.2 千人(R6.3 末現在)で市全体に占める割合は 2.9%にあたります。

(2)土地利用

土地利用は山林原野が74%を占め、田畑などの耕地が12%、道路・宅地などが14%となっています。

町内各地区別の土地利用は次のとおりです。

- 日置地区 面積20%、人口15% 日置川に沿って集落を形成しており、因州和紙産業や五本松団地の果樹栽培があります。
- 日置谷地区 面積11%、人口15% 農地が広がる地区ですが、公営の宅地開発が進み、住宅用地が増えています。
- 勝部地区 面積39%、人口9% 勝部川・八葉寺川に沿って集落を形成しており、周囲を山林で囲まれています。
- 中郷地区 面積18%、人口19% 農地が広がる地区ですが、青谷かみじち史跡公園の整備により文化財施設用地が増加しています。
- 青谷地区 面積12%、人口42% JR青谷駅周辺を中心に集落が形成されている他、海岸線に夏泊・長和瀬などの漁港集落が点在しています。

(3)人口（※人口データはR6.11.30時点に統一予定）

青谷地域の人口は、平成16年の合併時に8,072人（住民基本台帳人口）であったものが、令和6年5月には5,165人（同）と2,907人、36%減少しています。世帯数は、人口と比較すると減少数は少ないですが、高齢化の進行から、独居高齢者や高齢者夫婦のみの世帯が増加していることが伺えます。特に0歳～14歳の年少人口とその親世代に当たる20歳～39歳の年代の人口減少は加速しており、年齢構成の面でも少子高齢化の傾向が更に顕著となり、市内他地域よりも早く進行している状況です。

【住民基本台帳に基づく青谷地域の人口の推移】

単位：人

区分	青谷地域全体	日置地区	日置谷地区	勝部地区	中郷地区	青谷地区
H16年11月30日	8,072	1,363	1,153	842	1,529	3,185
R6年4月30日	5,165	801	773	446	991	2,154
比較	△2,907 (△36.0%)	△562 (△41.2%)	△380 (△33.0%)	△396 (△47.0%)	△538 (△35.2%)	△1,031 (△32.4%)

【住民基本台帳に基づく青谷地域の世帯数の推移】

単位:世帯

区分	青谷地域 全体	日置 地区	日置谷 地区	勝部 地区	中郷 地区	青谷 地区
H16年11 月30日	2,484	403	383	255	458	985
令和6年 4月30日	2,322	359	357	200	429	977
比較	△162 (△6.5%)	△44 (△10.9%)	△26 (△6.8%)	△55 (△21.6%)	△29 (△6.3%)	△8 (△0.8%)

【鳥取市各地域の少子化、高齢化の状況】

令和6年9月末時点

区分	旧市 内	国府 地域	福部 地域	河原 地域	用瀬 地域	佐治 地域	気高 地域	鹿野 地域	青谷 地域
0歳～14 歳の割合	12.7 %	12.7 %	10.9 %	9.7%	9.4 %	4.2 %	10.6 %	9.9 %	7.0%
65歳以上 の割合	28.9 %	30.6 %	37.6 %	40.4 %	43.4 %	56.4 %	36.7 %	41.7 %	46.6 %

3. 地域の特性・資源(歴史・特性・資源)

(1)地域の歴史

現在の青谷地域に人が住み始めたのは、土器や石皿、石斧などの出土から縄文時代と推測されています。さらに、「地下の弥生博物館」と言われている青谷上寺地遺跡からは、弥生時代中後期の護岸工事跡や祭り場跡が発見されています。

古代、この地域は因幡国の気多郡に属し、都からの「山陰道」が整えられ、因幡国内の主要駅「柏尾(かしお)駅」が設置されていました。中世末には鹿野城主亀井茲矩(かめいこれのり)が領地として治め、用水路と水田の整備を進めるとともに、青谷港は、命を受けた塩五郎太夫(しおごろうだゆう)の「朱印船貿易」の本拠となってにぎわいました。

明治10年(1877年)に最初の合併が行われ、その後数度の変遷を経て、明治21年(1888年)の町村制の公布に伴い、日置村、日置谷村、青谷村、

勝部村、中郷村が誕生し、大正3年(1914年)に青谷村は町制を施行し青谷町となりました。

昭和28年(1953年)に、青谷町、日置谷村、勝部村、中郷村が合併し、さらに昭和30年(1955年)には日置村を編入して青谷町区域が拡大しました。

そして、平成16年(2004年)には鳥取市と合併し、現在にいたります。

(2)地域の特性

①鳥取市西部にあって、国道9号線及びJR山陰本線が横断し、山陰道の一角をなす鳥取西道路と青谷羽合道路の結束点となる青谷ICといった交通の要所であり、市の西の玄関口となっています。

②山陰海岸ジオパークの拡大エリアとなった、全国でもめずらしい鳴り砂の浜である井手ヶ浜や青谷海岸と日本海の荒波によって形成された長尾鼻を含む「青谷海岸ジオサイト」、樹齢数百年といわれる杉や櫟の大木が生い茂る霊場の不動山や、千年の昔より因幡の国で作られてきた因州和紙の一大生産地がある「勝部・日置ジオサイト」として位置づけられ、豊かな自然環境に恵まれています。

③伝統的工芸品「因州和紙」を始め、地酒、醤油といった製造品、梨、びわなどの農産物、しいたけなどの林産物、いがい、岩がき、わかめなどの海産物、国の史跡に指定され、弥生人の脳が発見されるなど全国的・世界的にも注目を浴びている青谷上寺地遺跡、日本遺産の北前船寄港地、古代山陰道遺構など、地域資源を豊富に有しています。

(3)地域の資源

区分	主なもの
特産品	梨、びわ、いちご、しいたけ、いがい、岩がき、わかめ、地酒、醤油、因州和紙、鳥取和牛、けん玉
観光	あおや和紙工房、青谷かみじち史跡公園（青谷上寺地遺跡）、あおや郷土館、かちべ伝承館、不動山（3つの滝）、井手ヶ浜・青谷海岸（鳴り砂）、長尾鼻、青谷ようこそ館、日置桜酒造資料館、山根和

	紙資料館、因幡の菖蒲綱引き、日置のはねそ踊り、勝部岩力踊り、青谷駅前傘踊り、古代山陰道遺構、北前船寄港地
イベント	青谷ようこそまつり、青谷ようこそ市場、あおや鳴り砂ビーチフェスタ、夏泊朝市、かちべ伝承館まつり、日置収穫祭、青谷かみじちフェスタ、青谷町正月マラソン、青谷オープン卓球、青谷さんぼフェス、青谷音楽祭、こばしまウォーキング

4. 地域の現状と課題、めざす将来像

【地域の現状と課題】

① 地場産業の育成による活力ある産業の創出(農林漁業・商工業・伝統産業)

○農林漁業の振興

農業については、高齢化と後継者・担い手不足から耕作放棄地が増加しており、特に果樹園が深刻であり、認定農業者も平成17年度の14人をピークに令和5年度末現在では10人と減少傾向にあります。認定農業者への優遇施策を充実し、認定農業者を確保し、地域農業の担い手として農地の集積を図ることが耕作放棄地対策に必要となっています。

また、農業公社、農業生産法人、担い手などが行っている農作業受委託は、耕作放棄地対策に最も重要であるため継続した支援が必要です。

青谷地域には肥育牛、繁殖牛合せて約500頭が飼育されており、鳥取いなば農業協同組合を通して鳥取和牛として主に神戸市場に出荷しています。畜産農家は飼料の高騰、肉牛販売価格の低迷など厳しい状況にあり、行政も一体となって支援していく必要があります。

また、しいたけについては、本町の生産者が全国的な椎茸品評会で上位入賞するなど、栽培技術の高さが証明されていますが、後継者の確保、原木の確保などの課題も抱えています。

林業は、適切に管理が行われていない森林が増加していることから、管理

の集積や新たな経営主体への委託など生産の振興につなげる取組が必要です。

漁業を取り巻く環境は、魚価の下落、燃油高騰による経費の増加、漁協組合員数の減少など厳しい状況です。このような中、鳥取県漁業協同組合夏泊支所において平成 26 年度より定置網漁と定置網漁で獲れた魚を販売する朝市が始まり、9人の新規就業者の雇用が確保されるなど、定置網漁を核とした後継者育成、販わいづくりなど様々な効果が期待されます。

○商工業の振興

鳥取市西商工会の会員数は近年減少を続けており、会員の3割以上が70歳代と高齢化も進んでいます。令和6年7月には商工会青谷事務所も閉所となっており、商工業者の経営安定を支援することや、町内での創業など、地域内での就業や雇用の場を創出する必要があります。

○伝統産業の振興

伝統的工芸品である因州和紙の生産は、販売額の低迷や後継者不足などが課題となっており、先行きが不透明な状況です。一方、新規就業を希望する声もあり、県と市の助成制度「伝統工芸等後継者育成支援事業」や技術習得のために「あおや和紙工房」の活用を検討するなど、後継者育成の体制づくりに取り組んでいく必要があります。また、あおや和紙工房を中心に、因州和紙の特徴を活かした2次製品の開発などを行い、販路拡大につなげていくことも必要です。

《優先的に取り組む事項》

・伝統産業(因州和紙)の活性化

青谷が誇る伝統産業「因州和紙」の販路開拓や、因州和紙ブランドの魅力向上と情報発信の取組を支援します。また、伝統産業の後継者育成と技術伝承に取り組む、因州和紙産地強化を図ります。

・地場製品のブランド化(魚(定置網)、びわ、しいたけ、いちご、けん玉)

生産者や地域団体が主体となって取り組むイベントや商品開発を支援し、地場製品の魅力を伝える情報発信、新規加工品の開発等、多角的に付加価値

値を高め、地場製品のブランド化と収益化を図ります。

・地場製品の販路拡大(青谷ようこそ館、かちべ伝承館、道の駅西いなば気楽里)

都市交流等を通じた販売ルートの拡大や、青谷地域・鳥取市西地域の地場産品販売施設(夏泊朝市、青谷ようこそ館、かちべ伝承館、道の駅西いなば気楽里)での販売促進、2次加工、飲食提供への材料活用などを推進し、地場産品の需要増加を図ります。

・地場産業の担い手不足(人材育成、マッチング)

農林漁業の後継者の育成を支援するとともに、中山間地域等直接支払協定組織、多面的機能支払活動組織等の団体を支援し、地場産業を担う団体育成を推進します。また、UJI ターン希望者などと後継者不足となっている地場産業者のマッチングを推進し、地場産業の担い手不足解消を図ります。

・地元企業との協働による活性化(駅南工業団地、CSR)

地域雇用を生み出している駅南工業団地を始めとした地元企業と連携し、経営基盤の強化や雇用創出の施策を検討するとともに、企業の社会貢献活動(CSR)を支援し、企業と地域住民による地域活性化を推進します。

②地域資源を活用した観光振興

○観光の振興

青谷地域への入込客数が年間55,000人(資料「鳥取市主要観光施設等の入込客延べ人数(2023年)」による)程度にとどまる中、新型コロナウイルス感染症の収束による観光需要の拡大に伴い、地域の観光資源の「鳴り砂」、「紙すき」、「不動山」、「青谷上寺地遺跡」などに今後ますます注目が集まると期待されます。この機会を捉え、観光資源の有効活用に取り組み、ガイド養成など観光振興を図っていく必要があります。

令和6年3月には展示ガイダンス施設を含む青谷かみじち史跡公園が新たにオープンしました。「地下の弥生博物館」として全国・世界に誇れる遺跡を利活用し、本施設を地域に訪れる観光の拠点として位置づけ、施設を中心とした地域周遊に繋げていくため、地域住民と連携して観光受入れ体制を構築する必要があります。併せて、「青谷上寺地遺跡クラブ」を初めとして市民・企業と連携し、協働して史跡公園運営に参画することで、地域全体で「自

分たちの青谷かみじち史跡公園」という機運を醸成する必要があります。

《優先的に取り組む事項》

・青谷かみじち史跡公園への地域住民の参画

新たにオープンした青谷かみじち史跡公園において、地域住民が取り組むボランティア活動やイベント開催を支援し、地域住民の参画による「自分たちで運営する史跡公園」という機運を醸成し、史跡公園の活性化を図ります。

・地域資源(鳴り砂、不動山、長尾鼻灯台、北前船等)を守り育てる活動の推進

青谷地域ならではの様々な地域資源(鳴り砂、長尾鼻、長尾鼻灯台、霊場不動山、湊神社や北前船寄港地の痕跡、石工川六など)の素晴らしさを市内外に発信し、地域住民やまちづくり協議会が取り組む保存活動や磨き上げを支援し、地域資源の高付加価値化を図ります。

・伝統文化の保護継承(民話、ようこそ音頭、夏泊の海女)

青谷地域で昔から伝わる様々な民話・伝統行事・文化財を、後世に残すための地域住民の取組を支援するとともに、あおや郷土館と連携して情報発信に取り組み、伝統文化の継承を図ります。(日置はねそ踊り、勝部岩力踊り、因幡の源佐、菖蒲綱引き、ようこそ音頭、夏泊の海女 など)

・観光誘客の受皿体制(民泊・キャンプ場などの宿泊環境、ガイド、インバウンド)

青谷かみじち史跡公園の整備により、青谷地域を訪れる観光客の増加が見込まれる中、観光客が地域を周遊するための2次交通(レンタサイクルなど)の推進や、民泊事業者等と連携した宿泊環境の充実、あおや郷土館やガイドネットワークと連携したガイド体制の充実、あおや和紙工房等とのインバウンド需要への対応など、観光客の受入体制を充実させ、滞在型観光の促進を図ります。

・観光PR(様々な情報発信、新商品等開発)

全国に誇れる青谷上寺地遺跡のガイダンス施設「青谷かみじち史跡公園」の整備、発掘調査が進む「古代山陰道遺構」、「北前船寄港地」「夏泊」日本遺産認定など、貴重な歴史資源を新たな観光資源の中心として捉え、青谷町観光協会と連携して青谷かみじち史跡公園を起点とした様々な観光ルート

の開発に取り組むとともに、青谷上寺地遺跡周辺のコスモス畑のような「花」を活用した新たな見どころの造成や観光商品PRを行い、地域住民と一体となって観光のまちづくりに取り組みます。

② 安心して暮らせる中山間地域づくり(まち協・防災・共助交通・買い物)

青谷地域をはじめ中山間地域では、価値観の多様化や人口の流動化が進む中、地域コミュニティが希薄化してきています。一方、防災・防犯や買い物対策など、地域住民が連帯して助け合うことの重要性が、ますます高まっています。このような中、地域課題の解決に向けて、まちづくり協議会を中心とした市民・団体と連携を図っていくため、まちづくり協議会の活動を積極的に支援し、地域が主体となった課題解決の体制づくりが必要です。

《優先的に取り組む事項》

・まちづくり協議会の活性化(地区活動の見直し)

まちづくり活動の効果的な実施を推進するため、まちづくり協議会と連携を図りつつ、実施体制の見直しや地域活動の評価を進め、将来的に全ての地区で一括交付金制度を導入し、活動の活性化を図ります。

・災害に強いまちづくり(浸水対策、防災備蓄)

風水害や雪害、地震等の災害に対して安全性を高めるため、駅南工業団地等の浸水対策をはじめとした治水機能等の整備を進めます。さらに、総合支所改修工事と併せて防災備蓄倉庫を建設し、被災時の避難所の災害対応力の向上を図ります。

・生活基盤の安定化(共助交通の推進、買い物支援)

路線バスの廃止により脆弱となった地域交通体制を整えるため、まちづくり協議会等が検討する共助交通について必要な支援を行い、事業実施を推進するとともに、共助交通開始までの地域内運行を「青谷バス」の運行により体制確保し、地域交通の利用増進に努めます。

・地域防災力の強化(自助共助の推進、啓発)

全国で大規模な災害が発生する中、行政による防災対策には限りがあり、

住民自らの力で、生命と財産を守り、災害に対応していくための、「自助」「共助」の取組を推進し、自主防災会等の人材、組織の育成をまちづくり協議会と連携して推進します。

③ 地域福祉の充実による元気なまちづくり(健康増進・高齢者・子育て支援)

地域の住民組織や福祉に携わる関係者等と連携を図り、高齢者、障がいのある人、子ども達などこのまちに住む全ての人が、安心・安全に暮らせる明るい地域づくりを目指します。特に青谷地域では、急速に少子高齢化が進んでおり、介護予防の推進活動、介護が必要な高齢者やその家族への支援など総合的な介護・高齢者福祉施策の推進に取り組むことが重要です。

また、社会的に孤独・孤立の状態にあり、生きづらさを抱えながら暮らすさまざまな立場の人々に対して、地域で見守り支えるためのネットワークづくりや居場所づくりを充実させるなど、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく「地域共生社会」の実現を目指す必要があります。

《優先的に取り組む事項》

・子育て、健康の推進(公園等への運動遊具整備、健康イベント開催)

安心して豊かな生活を送るためには、心身が健康であることが大切な基本要素となります。公共施設における子育て環境の整備や、市民の健康促進につながる取組(ウォーキングイベント等)を支援し、健康な地域づくりを目指します。

・社会体育活動(卓球ほか)の支援

地域スポーツである「卓球」など、地域が主体となって取り組む体育活動(青谷正月マラソン、青谷上寺朗杯卓球大会)を支援し、地域の体育を活性化するほか、中学校・高等学校と連携して部活動の地域移行に対して、社会体育関係団体と連携して受け皿整備を検討します。

・高齢者、住民が元気に地域で活動したくなる動機付け

高齢者をはじめとした地域住民が、地域で開催される様々な催し・活動・教室などへ積極的に参加してもらい、心身の健康を向上させるため、まちづくり協議会等と連携した動機付けの取組を支援し、地域全体が活気あるまちを目指します。

⑤地域と連携した定住人口の増進

(移住定住、就業対策、空き家・土地活用、関係人口)

青谷地域では、人口減少により、駅前周辺の店舗の廃業や、青谷駅の無人化、将来的には駅舎の簡素化が懸念されるなど、賑わいが少なくなっています。

さらに、町内の小さなこどもを抱えるファミリー層が新たな居住環境を求めて、青谷地域外(旧市域、気高地域など)に転出するケースも見られています。一方で、青谷地域内の空き家が数多く存在するにも関わらず、移住定住に提供可能な空き家登録が進んでおらず、移住希望者へ紹介できる物件が不足する状況となっています。

人口流出を防ぐため、青谷地域で空き家、空き地の有効活用を進めることで移住希望者の転入と、ファミリー層の流出防止の両方に繋げるとともに、イベント開催による賑わいと関係人口の創出と、地域の活性化を担う人材の育成を推進する必要があります。

○県立青谷高等学校の活性化

県人口や生徒数の減少に対応するため、統廃合を含めた高校のあり方について検討が始められています。青谷高等学校は、にぎわいの創出や地域活性化の観点からも、青谷地域にとって必要な教育機関として認識を向上させる取組が重要となります。

青谷高等学校は地元就職率が他の高校より高いことから、地域人材を輩出している重要な学校であると位置づけられます。

また、かつて「卓球のまち青谷(昭和 60 年わかとり国体卓球競技会場)」、「卓球の青谷高校(インターハイ 30 回出場)」として名をはせた「卓球」を高

校の特色として、地域と連携して盛り上げることも、地域活性化につながる一つの取組として重要です。

《優先的に取り組む事項》

・駅前周辺の賑わい創出(青谷駅、青谷賑わいの場、など)

青谷地域の賑わいの中心となる、JR 青谷駅および青谷賑わいの場について、駅舎の再編や旧青谷上寺地遺跡展示館の利活用、青谷ようこそ館の活性化などを踏まえた、長期的な展望に基づく賑わい創出策を検討します。

・青谷に住みたい人を増やす(移住定住支援、就業支援、空き家情報発信)

空き家紹介事業に取り組む BFO じげと連動し、マッチングを進める一方で、空き家登録を強力に推進するとともに、空き家情報や地元企業の就職情報などを管理し、移住希望者へ適切な情報提供を行う体制を整備し、青谷に住みたい人への支援の充実を図ります。

・地域同士の繋がりの強化、関係人口の増加(池田市・市内他地域 など)

交流都市池田市をはじめとした青谷地域と縁の深い地域・市町村との繋がりを深化させ、経済・人的な交流の活性化による賑わいを創出するとともに、他地域からまちづくり協議会等への参画を支援し、関係人口の増加を図ります。

・地域のにぎわい創出(イベント、地域人材の発掘・育成)

まちなかの賑わいを創出し、地域の魅力を地域内外に発信するため、地域が主体となって企画運営するイベント(青谷ようこそ市場、青谷さんぽフェス等)の実施を支援します。また、地域活性化に取り組み、郷土を愛する人材の活動を後押しし、まちづくり人材の発掘と育成を推進します。

・空き家・空き施設の有効活用(旧商工会館、JR青谷駅、旧鳥取森田 など)

地域に点在する空き家・空き施設を調査・検証し、地域活性化への利活用策について、まちづくり協議会や地元団体と連携し検討を進めます。検討結果に基づき、チャレンジショップ設置や「青谷さんぽフェス」をはじめとした空き家を利活用するイベント開催を支援するとともに、地域再生計画の策定等を推進していきます。

・青谷高等学校の活性化(魅力創造、受皿強化)

青谷高等学校を青谷地域の財産として捉え、魅力ある学校運営を支援す

るとともに、県外からの入学生の生活を支援し、学校の活性化を推進します。

また、「青谷学」等による、高校生と住民との交流推進や、高校生の参画による商品開発、地域課題の解決の取組による生徒の教育・育成を通じて、青谷地域との関わりを深め、地域に根付いた人材の育成を図ります。

・地域の特色ある教育の支援(青谷上寺地遺跡、定置網、サーフィン)

青谷高等学校、青谷小中学校などが取り組む「青谷学」「みらあおプロジェクト」などの地域の特色ある教育プログラムについて、地域住民と連携して実施を支援していきます。

【めざす将来像】

将来の青谷地域がめざすまちの姿を実現するために、旗印となるまちづくりの総合的テーマ(青谷町がめざす将来像)を次のように定めます。

= 青谷町がめざす将来像 =

**「いつまでも暮らしたい、住んでみたい、歴史に彩られた
活気とにぎわいにあふれるまち 青谷町」**

青谷地域の振興を図る上で必要な要件

- ・転出人口の抑制を図ること
- ・生活に必要な利便性の高い店舗や施設が揃っていること
- ・市民が誇りに感じることができる資源、資産が活かされる施策があること
- ・市民自らがまちづくりや課題に関心を持ち、主体的に取り組む機運を醸成すること。
- ・自然環境などの住み良さと同時に地域に活気があり、多くの人を訪れるにぎわいがあること

5. プランの推進にむけて

(1)連携・協働によるプランの推進体制

地域未来プランがめざす将来像を実現するには、市(総合支所)のみならず、まちづくり協議会、地域住民、その他さまざまな関係主体が、地域づくりは地域に居住・関わる全ての人の努力によって達成されるものであるとの認識を共有し、連携・協働して取り組むことが不可欠です。

主な関係主体におけるそれぞれの基本的な役割は、次のとおり整理されます。

<市・まちづくり協議会・地域住民が担う役割>

鳥取市	<ul style="list-style-type: none"> ◆必要とされる施策を計画的に実施 ◆まちづくり協議会への助言・情報共有 ◆積極的な住民への情報発信
まちづくり協議会	<ul style="list-style-type: none"> ◆地域の特性に基づいた事業の実施 ◆地域住民のまちづくり議論の場の創出 ◆地域課題・地域ニーズの把握と共有
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> ◆積極的に地域のイベント・取組に関わる ◆地域の課題を自分のこととして考える ◆自らまちを変えていく・作っていく意識を持つ

(2) 評価・検証

プランの推進にあたっては PDCA サイクルの考え方に沿って、5年間の計画期間の中で、適宜プランの評価を行い、見直しの必要があれば改善計画を立案し、随時改善を行います。

また、プランに基づいて推進する実施計画については、青谷地域振興未来会議において進捗確認と評価を行い、改善しながら継続していきます。



＜今後のスケジュール（青谷町地域振興会議）＞

【地域未来プラン】

時期	内容
8月	地域課題のまとめ
10月	地域未来プラン（素案）の提示、協議
10月～11月	地域未来プラン（修正案）の提示、協議
	実施計画（案）について協議
1月	地域未来プラン（案）、実施計画（案）について承認
2月21日（予定）	地域未来プラン策定（本庁地域振興課）

【地域振興未来会議】

時期	内容
9月6日	設置要綱策定（本庁地域振興課）
10月	委員構成の協議（どの分野から選出するか）
	公募委員の公募スケジュール確認
10月下旬	新委員推薦依頼（回答締切11月下旬）
11月下旬～12月27日	公募委員の募集開始
12月上旬～中旬	選考会の開催（推薦候補者リスト作成）
	委員候補者へ委嘱依頼
1月上旬～中旬	選考会の開催（公募委員候補者リスト作成）
	委員委嘱の起案、市長決裁
1月下旬	地域振興未来会議委員の報告（青谷振興会議）
	応募者に選考結果を通知
2月上旬	地域振興未来会議委員の報告（振興会議会長会）